



創立80周年記念事業について

来年の創立80周年記念事業について、最新の情報をお知らせします。

- ◆ 時 : 2011年9月3日(土) 13:00より
- ◆ 所 : 京都コンサートホール(小) (演奏会～総会～特別イベント)
- ① 同窓会合唱団演奏会(13:00～15:00) (ピアノ)木下亜子
同窓会の2つの団体(京都・東京)がステージを構成します。また現団に協力参加を求めて行きます。
 - I. 同窓会合唱団男声 学歌 南弘明「月下の一群」 加藤文元(H3年)
 - II. 同窓会合唱団女声 小林秀雄「落葉松」 岡本慶子(S52年)
 - III. 現団(今後正式依頼し了解を得て設定)
 - IV. 東京洛友ハーモニー 珠玉の海外合唱曲 鈴木誠二郎(S46)
(通信第13号「お知らせ」に紹介しました昨年10月結成された関東の同窓生の合唱団です)
 - V. 同窓会合唱団混声 団伊玖磨「筑後川」 上床博久(S44年)
《アンコール》会場全体で歌える曲を選曲します。 チケット1,000円
- ② 総会(15:15～16:00)
- ③ 特別イベント 音源で綴る50年「合唱団CDライブラリー鑑賞」(16:00～16:45)
プログラム(予定)
 - ・S28 男声 「月光とピエロ」(最古の音源)
 - ・S35 女声 シューマン「はちすの花」
 - ・S36 男声 父のある庭(初演)より紀の国
 - ・S43 男声 グリーク「小鳩の祈り」
 - ・S43 女声 コダイ「天使と羊飼い」
 - ・S49 混声 地球は回るよ
 - ・S56 混声 White Christmas
 - ・H2 女声 「花に寄せて」より
- ④ 懇親会(18:00～20:00)
 - ・リーガロイヤルホテル京都(堀川塩小路) ・参加費1万円
 - ・会場は2F「朱雀」 また「桔梗」ではCDライブラリーの自由鑑賞を行います。

会員みなさまへのお願い

★ 同窓会費納入をお願いします

同窓会通信発行などの諸活動は同窓会費と諸幹事・有志会員の奉仕により支えられています。

[払込取扱票]が同封されている方は2010年度までの年会費(千円/年)納入にご協力下さい。

- ・ 会費納入済年度は、宛名ラベルに **¥【〇〇〇〇】年迄済** と記してあります。
- ・ 新入会、復会の方は、同窓会通信お届けなどの情報サービスが開始された年度から納入願います。
封筒宛名シールに **¥【〇〇〇〇】年カ** と記してあります。

◇ 77歳になられた年度迄の会費を完納された方は、生年月をお知らせ下さい。

78歳からの年会費は不要となります。

★ 住所、電話、メールアドレスを変更されたときは、同窓会にも連絡して下さい

(注) 日本郵便に転居先を届けてあっても転送期間は1年です。以後は転送されません。

変更連絡がなければ同窓会通信などの諸情報をお届けできなくなってしまいます。

※ 同窓会への連絡方法は下記①または②を利用して下さい。

- ① Eメールなら…[kucdosokai@gmail.com]または[nakano-masao@maia.eonet.ne.jp]
- ② 郵便なら…〒615-8111京都市西京区川島松園町7 京大合唱団同窓会 会員係 中野雅央



京大合唱団のあゆみ



創 設

1931年(昭6)4月、京大オーケストラに居た経済学部二回生の(故)竹内忠雄は「京大に合唱団を創ろう」と発意し、京都混声の仲間の応援を得て結成に踏み切った。団員募集のポスターは大学の許可が得られなかったため、貼っては剥がされ、又貼るといふイタチごっこであったが、約40名の団員を獲得して5月1日には「京都帝国大学男声合唱団」が誕生した。直ちに猛練習を開始、早くも6月28日には第1回の発表会を学生集会所で開催している。発表会に経費を費やしたため、財政は苦しく、打開策として京都放送局に売り込み交渉の結果、唱歌劇ならばとのことで、府一高女〔(現)鴨沂高校〕や同志社の女子生徒の協力を得て「京都人形座」なる唱歌劇団を結成してラジオ出演することで赤字を補ったと言う。この人形座やYMCAを通じて女声メンバーと、混声合唱団としての活動を始め、34年の第3回発表会には混声のステージも登場した。このように初期の段階から京大生(イコール男声)だけではなく、外部の女声との混声合唱団として、以後の歴史を綴ってゆく。

戦 時 中 の 合 唱 団

こうして始動した京大合唱団であったが、女声団員の定着に悩み、1937年には男声合唱団に改組する。だが翌38年には再び混声合唱団となり「男天下の京大に何と混声合唱団」と新聞に載る等、大きな話題を呼んだ。陸軍病院を慰問するなど「愛国合唱団」と称賛されたりしたが、国の戦時体制下、遂に41年4月混声は解散を命じられ、女声は「新声会」と言う女声合唱団になり43年まで活動を続けた。一方男声も学徒動員令により、団員は一人また一人減って行った。しかし残された少数の団員達は部室を守り、合唱の灯をともし続けた、第13回発表会は、何と敗戦直前の45年7月29日に、丸坊主にゲートルを巻いた学生17人により開催されている。よくぞこの時期にと驚かされる。

巡 り 来 た 春

終戦後、離散していた学生達は続々と帰還し合唱団の再建が図られ、1946年1月に混声合唱団が再結成された。戦時中の抑圧から開放された若者達は、自由と平和の喜びの歌声を高らかに響かせた。終戦後数年を経て社会の安定と共に、メンバーの飛躍的増加、音楽教育の普及によるレベルの向上が顕著になる。この時期、混声、女声の指揮者を15年に亘り務めたOBの(故)大野晴男の存在を忘れることができないが、50年から2年余り男声の指揮者であった多田武彦の、後の作曲活動を含めた活躍は特筆される。組曲「柳河風俗詩」(54年)、「富士山」(56年)、「藁科」(59年)、「父のゐる庭」(61年)は京大男声が、「潮風のうた」(79年)は京大混声が初演している、両指揮者の下、51年の関西合唱コンクールでは、男声(大学の部)、混声(一般の部)共2位入賞と言う団史上他に例のない好成績を挙げた。一方、団運営は総務中心の運営から委員会制に移行し、これは現在にも継承されている。活気溢れるこの時代を特徴づけるのはグループ活動で、中でも「オペラ研究会」は52~54年にかけて、「カヴァレリア・ルスティカーナ」、「フィガロの結婚」、「ドン・ジョバンニ」を、装置・衣装・演出等全て団員のみの手作りで本格的に上演したことだろう。戦前、敗戦直後の先輩の努力と苦勞が開花した「黄金時代」と言われるのもむべなるかなである。

「うたごえ運動」の時代

1950年朝鮮戦争が勃発し、自由で平和な民主日本に翳りが見え出す。こうした中で「社会に明るい歌声を」と言うスローガンを掲げた「うたごえ運動」が53年頃から爆発的に広まり、京大合唱団も大きな影響を受けた。「うたごえ」は団の主要な潮流となり、「広く社会に目を向けた活動を」を目指し、メーデーや集会、労組支援音楽会、水害救援活動等にも参加した。「社会に結びついた生きた歌を」の実践は、やがて演奏旅行と言う形に結実して行く。57年の中国地方から始まり、北陸・中部地方、九州地方、京都府北部、山陽地方、四国地方と毎年3月、10日~2週間に及ぶ長期の演奏旅行を敢行し、広い範囲に足跡を残した。また活発になった他大学との交流を背景に、54年に大学合唱協会(DGK)を結成し、毎年演奏会と交歓会を持った。

創 作 活 動

1960年代は日本の合唱活動全体としても、日本独自のものを創り出して行こうと言う動きが高まって来た。京大合唱団では、詩を自分たちで選んで、それに作曲を依頼する依頼創作活動が活発化し、62~63年「地下たびの歌」、「地下水」、「ひまわり」他(宗像和)、64年「死んだ少女」(清瀬保二)、65年「きけ、わだつみの声」(大木正夫)など9作品を生み出した。

激動一分裂と大学紛争

1966年11月、男声の一部が集団で退団して新しく「京大グリークラブ」を作った。66年の関西六連演奏会に女声の出演を決めたことから、男声のみの運営を主張する他大学の猛反対に遭い、その善後策の話し合いの過程で「男声単独加盟」を拒否する団の姿勢を不満とする一部団員による、京大合唱団退団・単一大学生のみの男声合唱団創設の動きがあった。これが定演前に表面化し、大部分の団員の説得にも応じず十数名が団を去った。この事件を通して団員一人一人が各々の考え方を持ちながら、互いの要求に耳を傾け、自由に話し合える基盤を持つことの重要性を改めて認識した。そうした姿勢を取り続けたことによって、事件からの回復も早く、団の存続が今日まで可能になったと言える。68年日大に端を発した大学紛争は、東大安田講堂封鎖事件を経て京大にも波及した。京大合唱団も激動の荒波にもまれ本部構内に立てこもった男声団員も多かったが、今歌うことの意味について話し合いを重ねながら新たに結束を固めた団は、一度も練習を欠かさず、合唱する場を確保する確かな目的意識を保ってこれを乗り越えて行った。

「ヤング路線」世代

1970年代後半に入ると「団が変わった」と言われるようになる。大学紛争を知らない「平和ボケ第一世代」になり、「思想の色が完全に消えた」と言われる団員達の時代となり、一般合唱団たる所以でもあった女声の中の社会人は殆ど姿を消して学生合唱団そのものになっていった。各大学の学園祭等に出演する内に、それまでの「ステージ上では直立不動で」との意識は薄れ、テレビ番組の影響もあり、踊り且つ歌うエネルギッシュなステージショー的要素を前面に打ち出した、いわゆる「ヤング路線」が盛り上がりつつ行った。

活動の転換

「京都音楽サークル協議会」(音サ協)は「うたごえ運動」に伴って出来た組織で、1954年以来京大合唱団は欠かさず参加していたが、80年後半になり年間スケジュール見直しの動きの中で、例年通りとして参加して来た勤労者音楽祭への参加を取り止め、音サ協からも脱退することになった。これらにより、戦後膨らみ勝ちに変動し続けて来た団のスケジュールも、団全体では「春の発表会」、「京都合唱祭」、「定期演奏会」の3回、男声・女声がそれぞれ「ジョイントコンサート」を行うと言う現在のよう形に落ち着いた。それに団内行事として、フェアウェルコンサート、団内音楽会、団内ピクニック、春・夏・夏休み(シビア)・定演前(追い込み)の各合宿と言うように、活動パターンは80年代後半から90年にかけてほぼ固定化した感がある。

レパートリーの変化

1950年代の「うたごえ運動」に由来し、京大合唱団でもステージのあらゆる機会に行ってきた「全員合唱」も、70年代後半になるとさすがに時代遅れとなり、それに代わり以前の「ヤング路線」を引き継ぐような形でショー的な視覚的にも楽しめるステージが、80年代から「企画ステージ」と言う呼び名で登場するようになった。これらは様々な形態を模索しつつ次第に定着し、大規模化した。練習時間の制約、スタッフの過大な負担などの問題があり、一時代を築いた「企画ステージ」も時の経過とともに下火となって行った。こうした動きに伴い、レパートリーの方も大曲、難曲指向を強めて来ると共に、現代邦人作曲家の作品を取り上げる度合いが非常に多くなっている。

将来に向けて

1990年代後半から多くの大学合唱団の例に洩れず、京大合唱団でも団員数の減少が起こっており、近年は100名程度で推移している。50年代後半や80年代後半の如く200～300名の団員を擁した時代から見れば相当な落差である。これは各人の趣味、価値観の多様化や時代風潮を反映した結果と考えられ、他大学の名門グリークラブ・合唱団も同じ傾向にあるが、その中でも京大合唱団はよく健闘していると思われる。「京大合唱団」であるという自負のもと、新たな世紀に一層の飛躍、発展を期待したい。

(創立70周年記念演奏会ブックレットより転載)

あの日から70年

S16年卒 藪内 美智代

三吉昌子さん、この度京大合唱団創立80周年記念特集への寄稿の依頼がありました。本来なら、数年に亘ってアルトのパートリーダーだったあなたに戦時中の合唱団を語っていただくのが一番ふさわしいと思うのですが、それが叶わないので、代わりに私が当時の思い出を辿ることに致します。

その頃、私が属していたNHK大阪放送局教養課の本曜会(混声合唱団)の主宰者竹内忠雄氏と、小学校の同級生服部勝氏からの再三再四の要請で、近衛通りの集会所を初めて訪れたのは、S15年4月初めの土曜日でした。その後、林良平氏、総務の吉田忠男など、男声5人、女声4人のダブルクワルテットができ上がり、戦雲漂う不安に満ちた時代にも臆さず、歌いかつ語り合った青春の日々は珠玉のような2年間でした。

この合唱を通じて培われた友情、貴重な人間関係が、戦後無事還って来た5人を中心に創立されたアルマ・マータ・クワイアの精神的中核になったのではないのでしょうか。

今日は奇しくも9月18日、丁度70年前に小倉山で合唱した光景をまざまざと思い出します。
“小倉山 名も無き池の彼岸花 天花となりて何を語らん” (H22. 9. 18記)

母、鳥越綾子(S14年卒)のこと

S40年卒 鳥越 俊太郎

私が京大合唱団に入団した昭和33年、母・鳥越綾子は38歳でした。父・俊雄は42歳(平成2年、73歳で死去)。二人は京大合唱団で出会って結婚した訳ですから、私が入団した当時「団内結婚二世第1号」ということで、随分話題になりました。

母は福岡の地で複数のママさんコーラスの指揮者となり、同時に福岡市他の数多くあるママさんコーラス連盟のリーダー役もやって頑張っていました。その功績を認められ、福岡市長から表彰を受けたほどです。

然し、その母も今年10月に満90歳。心の張りを失ったのか、よく転倒し骨折を繰り返しました。私を初め子供たちで相談、母の一人住まいはこれ以上無理と判断して、母の家の近くにあるケアハウスに入ってもらいました。

新しい環境に慣れるまで少し心配しましたが、先日そのケアハウスを訪ねたところ、何とケアハウスの住人たちとコーラスを始め、棒を振っていました。何せ90歳ですから直近の記憶力は落ちてはいるのですが、音楽の世界では現役のようです。

コーラスが母の老後を輝かせています。音楽万歳です。70歳の息子としては。

思い出と悲しみに耐えて

S29年卒 熊谷 直英

入学した1950年、宇治分校が開設されて一回生は宇治。二回生になって吉田へ進学となり京大合唱団に入団した。男声指揮者は多田武彦氏、混声は故・大野晴男氏のもと、この秋の関西合唱コンクールで男・混声とも2位に入賞したのが懐かしい思い出である。

T2のパートリーダーを2年間。演奏旅行などを企画して四国松山ご在住の先輩を頼りに愛媛へと、これも団の初体験であった。

女子大学が数少なかった当時、女声メンバーの多くは色んな職場に勤務しながら合唱団に通っており、鴨沂会保育園の保母さんだった故・愛妻八重子もその一人。八重子とは60年間の長い付き合いだった。

愛妻亡き今も、淋しさ、悲しさに耐えながら、毎水曜日夜のアルマ・マータ・クワイア(大阪)、月一回の同窓会合唱団(鴨沂会館)と、合唱活動を続けている。今後も健康である限り。

歓喜の思い出

S29年卒 瀬川 淑枝

京都の朱雀高校を卒業して、すぐに入団した京大合唱団。当時テナーの早川さんに、「こんな子供みたいな人が入って来たら、京大合唱団も、おしまいやな」と言われたのをついこの間のように懐かしく思い出しています。

当時、混声合唱団は故・大野晴男さんの指揮でコンクール入賞を目指して、ブラームスの「ケルビンソング(天使の歌)」を、ソプラノ、メゾ、アルトー1、アルトー2、テナー1、テナー2、バリトン、バスと8声部に分かれて猛練習していました。特に半音づつ上がるころが大変でした。

男声は多田武彦さんの指揮で「月光とピエロ」の練習を何度もして素晴らしいハーモニーを聴かせていました。

そして迎えた「第6回関西合唱コンクール」、男声、混声ともに「第2位」に入り、みんな大喜びで建物の周りを何度も歩き回った日のことを、昨日のことのように懐かしく思い出している昨今です。



半世紀前の話

S34年卒 T2 深尾 正之

'55年に合唱とは縁のない田舎の高校から京大に入った。宇治分校合唱団が私の合唱との出会いだった。コーリューブンゲンで音程とリズムの勉強をした。読譜力が音楽の世界を広げてくれた。歌曲集などを買ってきて歌った。

2回生になって、京大合唱団に入団、月水金が合唱練習、火木にそれぞれ2日の家庭教師をこなすという生活であった。それでも暇があれば部屋に集まり、仲間が持ち込んだ合唱曲集をよく歌った。一冊の楽譜を4-6人で覗きこんで歌ううちに、楽譜を上下逆から読む特技を習得した。高槻神峰山寺の合宿で多田武彦さんから送られてきたばかりの楽譜で「富士山」の練習をしたのを今もよく記憶している。

ずぶの素人が1年余りで、T2のパートリーダーを勤め、翌年には、混声のサブコンをやらせてもらった。その頃は、学生運動も盛んで、4回生の期末試験前日に学力テスト反対の奈良でのデモで、機動隊の追跡を必死で逃げた。捕まって留年していたら、もっと合唱キチガイになっていたかも知れない。

京大合唱団で育まれたもの

S35年卒 野村 透

1. 団歴

1956年3月合格発表と同時に入団、入学式の学歌をオケボックスで歌う。その年から2年間男声指揮。DGK、勤音、中国山陽、九州、中部東海演奏旅行など全ステージに出演。

4回生では、京都府演奏旅行を実行した。卒団後1965年から3年間混声指揮。1965年、京都合唱コンクールで京都エコーを抑えて一般の部と総合1位を獲得。1966年の「分裂総会」で、徹底話し合いを主張、残留者の結束を図った。定演に13回出演。

2. 選曲(知られざる名曲の紹介)

清瀬保二、ギリシア正教聖歌*、コダーイ*、フィンランド民謡*、ブラームス。

(*アルハンゲルスキー曲、コダーイ廃虚、カラッドの歌、は多分日本初演、バラードは愛唱歌となる。)

3. 学んだ事と実践した事。

「京大合唱団の純粹培養体論」を提唱、「卒団後は合唱運動を通じて社会に貢献」を生涯の理念として、アルマに20数年在籍、一方、モーツァルト記念合唱団の創設、京都ゲヴァントハウス合唱団員として多くの海外演奏を体験した。

団の分裂、そして守ったもの

S44年卒 宮地 明彦

1966年11月、定演を直前に控えた男声合宿夜のミーティングだった。当時総務をしていた私は冒頭話を切り出した。「このメンバーの中に定演が終わったら退団して新たな合唱団を作ろうとしている人達が何人かいる。陰で分裂活動を進めている人達と一緒にこのまま定演を迎えることは出来ない。その人達は分裂活動の実態をこの場で明らかにして頂きたい。」

発端は関西六連の創設だったと思う。六大学というブランドを正面に掲げたこの団体と、一般合唱団である京大合唱団とは音楽に対する姿勢で異なる点が多かった。当時、団内にはいろんな考え方がおり、一部には京大男声という一面を強く志向する人達もいた。そんな人達が六連の動きに刺激され、ついには分裂活動にまで繋がっていった。

合宿のミーティングは深夜に及び、十数名のメンバーがそのまま合宿所を去った。分裂活動を止めない以上、定演を一緒に歌うという選択肢はなかった。

そして我々が守ったもの、それは、京大合唱団の“人の絆を大切に、皆で心を合わせて合唱する”良き伝統であったと思っている。

芸術性と大衆性

S45年卒 B2 高木 秀雄

私が所属する合唱団では隔年で演奏会を開催していますが、演奏曲についてはいつも大きな議論になり、2つの方向性に分かれます。

「古典の名曲」、「外国語の歌」、「難易度が高く、通に受ける曲」の方向と、「親しみやすい曲」、「初めて合唱を聴く人にも分かり易い曲」の方向です。この議論をするたびに、私には京大合唱団の「うたごえ派」と「芸術派」の論争の時のことが思い出され、私にとって大きな課題が継続していた気がします。

音楽の世界にはこの問題はずっと昔からあり、一時期解決しても時代・世代が変わればまた現れる問題です。私は今では、問題の解決はそのどちらを選ぶかではなくて、「どういい演奏をするか」に尽きると考えています。本当に上手ければどんな単純な曲でも合唱オタクをも感動させられるし、またかなり高度な曲でも初めての人に感動してもらえるということが、これまでの経験の中から確信になりました。

多くの聴衆に対してバランス良く曲を選んだら、あとはいかに上手く演奏するかだけです。



新しい「BOX」

S46年卒 鈴木 誠二郎

同窓会合唱団、そして10年後東京洛友ハーモニーを立ち上げて思い出すのは、ただ一つの言葉。数年前同窓会名簿作りで、全国の同窓生に消息を尋ねた折り、幾人もの方から「自分は今歌っていないけれど、同窓会合唱団が活動し続けていて、いつでも戻れる場があることが自分の心の拠りどころになる。自分もまたいつか歌いたい。」と返って来た、あの言葉である。

私のエネルギーの源泉のひとつは、現団時代よりずっと大きな人の広がりの中で、「楽しいイ・深いイ・美しいイ」音楽にチャレンジすること。もうひとつは、いつかは皆が戻って来たいと思えるような、穏やかな「場」を守り続けてゆくことにあるように思う。

人それぞれに、ひと色に染められない心の襞と綾を持ち寄りながら、ハーモニーのひと時を共に過ごす何とも言えない喜び。その場は、80年の人の鎖を一気通貫する、新しい「BOX」なのだと言えるのかも知れない。

歌い続けること

S47年卒 織田 ゆかり

私が在籍したのは学園紛争の時代でした。学内で日々異常な事態が起き、男声の表情が深刻になっていきました。「こんな時に歌っていていいのか」思いは様々でした。しかし練習は懸命に続けられました。「みんなで歌い続ける意味は必ずある」そんな信念があったように思います。

関東の同窓生で結成された「東京洛友ハーモニー」が、今年7月に東京都合唱祭で初舞台を踏みました。演奏の出来が心配でしたが、様々な世代の団員の声が不思議に一つに揃いました。

講評の先生からは「学生時代にどれだけのものを合唱に注いだかよくわかる演奏」と言っていただきました。京大合唱団の誇りは「とにかく歌い続けてきたこと」であり、それが世代を超えて声も心も一つにするのだと思います。

太平洋戦争中の厳しい時代にも歌い続けてくださった先輩方に改めて感謝したいと思います。



50回定演のころ

S48年卒 石動 敬子

40回定演の年に入団した。紛争の世代と呼ばれ、ろくすっぽ授業もなく、とにかく卒業、就職した私達だった。その後の激しいアップダウンに音を上げつつも何とか完走？にこぎつけたのは、京大合唱団のお陰だったか。

疲れない山行とか走法に関心があるが、鼻歌やおしゃべりが有効とか。してみると、卒団以来の例えば「歌のつどい」、そして「同窓会合唱団」等々の企画から実行まで、仕事と並行してこそ有効だった気がしないでもない。

そもそもは年賀状からの発案だった。結婚して子供を授かったあの頃。子連れで又会いたいねと1歳児連れで1泊した51年大阪わらび会館。3年後の南禅寺。100人、200人と集まり、打ち上げの楽友会館での子供たちのサイクリングブギの写真は、今思えば奇跡のように美しい。50回定演のころだった。

その子たちも人の親となり、私たちも定年を迎えた。でも何故か、世代を超えて集まった時の集中力は信じていい気がしている。

なにもわかっていなかった かもしれない、あの頃

S55年卒 石井 亮平

京大合唱団に入って初めて合唱を始めたから、京大合唱団が合唱のすべてだった。ガリ版刷りの楽譜、学生指揮者、パート練習、レバ研、団ピク、議論。学生合唱団のカガミだった。私自身、歌曲にもオペラにもオーケストラにも邦楽にも無知だった。

だから、ではないが。ハーモニーを楽しんだ、歌詞のイミを考えた、リズムに苦勞した、子音が発音できなかった。しかし、合唱である以前に歌である。が、最後まで歌を歌として捉える事が出来なかった、歌っていなかった、そのような努力をしていなかった…という、不安がよぎったのはいつの頃だろうか。カラオケが流行った、妻が声楽のレッスンに通った、娘がオーケストラに入った、私が地元や職場の合唱団に入った、セカンドからバリトンに移籍した…年も(多少は)経った…今も…

先日、とあるはずみで、ある混声の練習を振った。やはり何もわからなかった。

合唱団最優先だったあのころ

S55年卒 佐藤 剛平

京大合唱団の80年の歴史を日本史に準えると、私が在籍した時期はちょうど中世に当たるのでしょうか。所謂学生運動も収まり、歌声運動にもビートルズにも乗り遅れた世代で、青春の情熱をひたすら仲間と歌う事に熱中していました。

当時の年中行事といえば、定演の他に綾部合宿、春発、団ピク、団音、合唱祭に勤音祭、ジョイントコンサート等、常に目の前の目標に向けて忙しく活動していたように思います。

当時、私は学生指揮者として、合唱団最優先の生活をしていましたが、でもそのお陰で多くの友人に恵まれ、今はそれが何よりの宝になっています。京都に在る間には、同窓会合唱団にも指揮者としてかかわる事ができたのは幸せでした。

現在は四国の高松にて、開業医として多忙な日々を送っていますが、近年再び合唱活動を始めて、まるで30年前のあの頃と同じように、演奏会に向け情熱を傾ける日々…あの時代があるから今があるとつくづく感じています。

次の「一幕」

H3年卒 加藤 文元

時代の変遷を「一幕」分だけ実感できる年齢になりました。京大合唱団においても同様です。もしかすると、京大合唱団はその一つの「幕」を終ろうとしているのでしょうか。

1980年代終わりから始まったこの幕では、それまでに培われた果実から、自分たちの欲しいものを自由に刈り取り、充実した活動を謳歌してきたように思います。この間、団員数は減り続けましたが、その分、団員相互の距離感が近くなり、その活動にも時代精神を反映して個々人の繋がりを意識したものが多くなってきました。もちろん、このままずっとこの状況を続けることはできないでしょう。いつかは、この天下太平な一幕も終わります。

もしかしたら次の幕の序曲は、もう始まっているのかもしれません。京大合唱団とそれを支える同窓会にとって、この来るべき未来の「一幕」が、その後の世紀においても、意義深いものであることを願っております。

変化し続ける京大合唱団

H17年卒 太田 茂之

京大合唱団は話し合いを大切にし、自分たちの意見をぶつけ合い、時にはまったく意見が合わずに団を去っていく人間が出る。このシステム(伝統)は一見すると非常にめんどくさく、時間もかかる。しかし、このシステムは伝統という形にとらわれずに毎年各々の時代のカラーを大切に、柔軟に変化する可能性を残していると言えるのではないだろうか。

現代は探せばいろいろな活動があって、どの大学合唱団も人数が激減している。その時代において京大合唱団がある程度の人数を確保し、大きな団体、レベルを維持しているのには時代に柔軟な対応ができるシステムが備わっているからだと思う。

確かに時代が変わり、その合唱団の活動に対して思うところが増えるかもしれない。しかしその変化こそ私たち京大合唱団の強みであるのだ。この変化し続ける京大合唱団を中心に様々な時代を生きてきた人間がつながっていることを誇りに思い、そのつながりを大切にしていきたい。

創立80周年を迎えて

H22年度京大合唱団総務
大竹祐一・由里今日子

京大合唱団が創立80周年を迎えます。団の大きな節目に立ち会えることを大変うれしく思います。

1931年の創立以来、戦時下の規制や組織の分裂、団員の不足などの困難にあたりながら、合唱団の灯を守り続けようと多くの方が尽力されてきた…というのは同窓会の方からの受け売りです。しかし、団運営における話し合いの重視などの伝統は現在でもしっかりと根付いているように思います。口頭意識はしていなくても、先人達によって作られた基盤に支えられた団なのだと痛感しています。

現在の団では、インターカレッジの合唱団かつ大学サークルとして、日々の練習やさまざまなイベントを行っています。団として開いている演奏会は春の発表会・中期演奏会・定期演奏会の年3回で、活動の中心となっています。

歴史の中で育まれてきたものと、時代に必要とされる新しいもの。両方を大切に、これからも京大合唱団が多くの人に愛されるよう努力していきたいと思っております。



お知らせ

園遊会の案内

これまで2年に亘り園遊会を開催して参りました。今年度下記の通り計画しましたので、所定のお申込みによりふるってご参加ください。

2010年11月6日(土)

- ◎ 11:00 京都御所拾翠亭前に集合
(烏丸丸太町より丸太町通北側を東へ、最初の門より御所に入りすぐ)
http://www.fng.or.jp/kyoto/info/kyoto_service2.html
- ◎ 11:00～12:00 京都御所拾翠亭、閑院宮邸跡など参観
- ◎ 12:00頃 移動(烏丸丸太町より四条河原町へ)
- ◎ 12:30～15:00 先斗町京料理「春神」にて昼食(定員40名)
中央区先斗町四条上ル30m西側 Tel:075-221-0011
<http://patola.jp/search/detail/id-611.html>
昼食代 3,000～4,000円を予定

(申込) ・葉書 : 〒603-8145 京都市北区小山堀池町28-16 石動宛
 ・FAX : 075-241-4933
 ・メール : isurugi@pp.iij4u.or.jp
 のいずれか(いずれもフリーフォーム)により10月31日(日)までに申込を。
 行き違いを避けるため電話による申込はご遠慮ください。
 なお昼食については定員に達した段階で申込を終了します。

(発起人) 吉田郷弘(S34)、石動正和・敬子(S48)、梅原節子(S53)、加藤文元(H3)



現団の定期演奏会

2010年12月5日(日) 文化パルク城陽プラムホール(近鉄京都線寺田駅より徒歩5分)
 プログラムなど詳細は、改めて同窓会のホームページに掲載しますのでご確認ください。
<http://www.eonet.ne.jp/~kuc-dosokai/news.html>

(((京大合唱団同窓会 連絡先不明の会員)))

下記の方は現在連絡先不明となっています。連絡先をご存じの方は同窓会宛お知らせ下さい。

メール : kucdosokai@gmail.com 郵便 : 〒615-8111京都市西京区川島松園町7 中野雅央気付 同窓会会員係

卒年	氏名	旧姓	卒年	氏名	旧姓	卒年	氏名	旧姓	卒年	氏名	旧姓	卒年	氏名	旧姓				
S24	山田 幸世		S63	北崎 美香		H05	笠松 真紀子	安藤	H09	岡村 浩明		H16	江島 啓					
S25	大橋 淑男			橋本 俊幸			小牧 修			加藤 隆彰			大塚 祐平					
	和田 幸男			福嶋 真澄	釜江	三原 啓紀		大田 薫		雁津 克彦								
S35	真田 善子	佐野			山本 圭子		H10	犬伏 和子	土田	H10	岡田 顕				田中 克樹			
S40	杉島 澄子		吉川 博之		奥 貴久子			岡田 拓也				平井 美也子						
S45	亀井 豊永		H01	梶山 慎一郎		H06	河合 拓也		H11	大和 秀俊		H17	近藤 大介					
S51	増谷 澄香	尾崎	H03	河合 保典				杉本 真依子		H12	石田 裕美子				田代 真司			
S53	田辺 良子				田中 正			宝関 淳					長岡 薫	梶原		堀江 麻世		
S55	植村 真由美		H04	小林 宜子	水口	H07	伊藤 みどり		H13	川瀬 暁子				升野 振一郎				
S56	宇野 敏満			小牧 聖子	矢口		高倉 秀代			遠山 晴信		H18	飯野 晋			榎 洸太		
	宇野 久美子	河盛		鷹野 哲男			鳥海 治房			萩原文				松永 有仁			安藤 美奈緒	
	高宮 周一			高橋 元			佐々木 幸子			三輪 浩司			H19				今井 琢磨	
S59	林 恵美子		H08	鶴亀 賢治		H08	秋山 直子	大村	H15	細入 夏加		H20						
S62	長谷部 誠			鶴亀 香苗	石田		山本 千尋	鈴木								望月 道草		
				山根 明仁														

※ 同窓会通信第13号の連絡先不明者表に追加 (2010年9月19日現在)